#



#

#

#

#

#

#織守きょうや（おりがみ・きょうや）

#１９８０年ロンドン生まれ。２０１３年『霊感検定』でデビュー。15年「記憶屋」で第22回日本ホラー小説大賞読者賞を受賞。同作に始まる〈記憶屋〉シリーズは累計60万部を突破している。２０２１年『花束は毒』が第５回未来屋小説大賞に選ばれる。他の作品に『黒野葉月は鳥籠で眠らない』『響野怪談』『花村遠野の恋と故意』『幻視者の曇り空』『学園の魔王様と村人Ａの事件簿』『悲鳴だけ聞こえない』『彼女はそこにいる』『隣人を疑うなかれ』など多数。

#扉イラスト／原百合子

#

#

#

#　高校二年生の新学期初日、窓際の一番後ろの席でうたたねしている女子生徒がいた。

高中二年级的新学期第一天，最后一排靠窗边的座位上有个女学生在打着瞌睡。

#　机に突っ伏して目を閉じているせいで、長い髪は机の端から垂れている。ほかの生徒たちよりも大分明るい色のそれは、緩やかに波打っていた。日の光に当たって、金色に見える。ライオンのたてがみのようだ。

她闭眼趴在桌上，于是一头长发便从桌边垂下。与其他学生截然不同的耀眼长发，在空中缓缓晃动。正好阳光洒落，把头发染成了金色。仿佛狮子的鬃毛一样。

#　髪と腕に埋もれて、顔は、三分の一くらいしか見えなかった。

在头发与双臂的遮掩下，她的脸只露出了三分之一左右。

#　それなのに、何故か、目が離せなかった。

然而，不知怎的，我的视线却无法从她的脸上离开。

#

#　彼女の名前はといった。

她的名字是盐野悠。

#　おそらく一六五、六センチはあるだろう長身で、体が薄く、スタイルはいいはずなのに、猫背なせいか、そう見えない。

个子偏高，大概一米五，六的样子，身材纤细。本应很好看的体态，却因为驼背，显得十分普通。

#　なんだかだるそうにゆっくり動き、窓際の席で、ときどきあくびをしている様子などは、変わった毛並みの、な動物のようだった。

#　目立つ外見に反して、どちらかというとおとなしい性格のようで、たいてい静かに一人でいた。特にしそうでもなかった。

#　自分からはあまり話さないが、話しかけられれば答える。愛想がいいとはいえないが、感じが悪いわけではない。集団に入ると仕切り役になることの多い私とは、正反対のタイプだった。

#　授業中に自分から発言をするようなことも一切なかったが、英語の授業で一度当てられて英文を朗読させられたときは、驚くほど発音がきれいだった。少しハスキーな声も心地よくて聞きれてしまうほどだったが、普通に話しているときは特に何も感じない。ぼそぼそと、一言二言しか話さないからだろう。もったいない。

#　体育の授業では、長い手足をもてあましているようで、走るのが遅かった。運動は得意ではないようだ。

#　お昼休みになると、どこかへ行ってしまう。私は初日に「一緒に食べよう」と誘われた近くの席の女子たちと、なんとなく一緒に食べるようになっていたが、昼休みに塩野を教室で見かけることはなかった。

#「ちょっと変わってるけど、いい人だよ」

#　一年生のとき、彼女と同じクラスだったという女子生徒が言っていた。もともと塩野を知っているらしいクラスメイトたちは、彼女を、そういうものとして受けれていた。新しくクラスメイトになった生徒たちは、様子見を続けているうちに、一定の距離を保つのが常態化しそうな雰囲気だった。

#　お互いに、それが一番いいとなんとなく感じているのだろう。クラスはうまく回っていた。

#　塩野を気にしているのはおそらく、私だけだった。

#　どうして気になるのか、自分でもよくわからない。

#　珍しい動物をつい見てしまうようなものだろうと思うが、気づいたら、目で追ってしまっている。

#

#「あ」

#　下校途中、角を曲がったら、特徴的な茶色い髪が見えて、思わず声をあげていた。

#「塩野さん。帰り道、こっちなの？」

#　塩野は、ぎょっとした様子で振り向いた後、無言でいた。目が泳いでいる。

#「知らなかった。私もこっち。一緒になるの、初めてだね」

#　一年生のときと同じように、私はクラス委員に選ばれていた。新学期が始まってしばらくの間は色々と雑務があって、帰りが遅くなることが多かった。

#　塩野は授業が終わると、いつもさっさと帰っているようだったから、私と帰る時間が重ならなかったのだろう。

#　一緒に帰ろう、と口に出すほどのことでもない。私は自然に彼女の横に並んだ。

#　同じ方向なのに、わざわざ離れて歩くのも変だ。

#「いつもどこでお昼を食べているの？」

#「……なんで？」

#「別に理由はないけど、気になっただけ。屋上とか？」

#「いや……ああいうとこにはたいてい先客がいるから」

#　美術室とか音楽室とか、と塩野はもごもご答える。

#　他に人がいないところでゆっくり食べているということのようだ。

#　教室にいるときと同じで、話しかければ答えるが、なんだか居心地悪そうにしている。それに、私を見ない。

#　どうも、警戒されているようだ。

#　もしや、彼女は、私のことをクラスメイトとして認識していないのではないのか。

#　もう、同じクラスになって二週間近くつというのに？

#　私はクラスでは目立つほうだ。れでなく、私の容姿は、それなりに印象に残るものであるはずなのに――いや、しかし、塩野ならあり得る。周囲のことに、あまり興味がなさそうなのだ。

#「同じクラスの、だけど」

#「……知ってる」

#　塩野はそう言いながら目をらした。

#　でしょ、と指摘はしないでおく。

#　そのやりとりの後、塩野の表情や態度から少し硬さがとれたので、クラスメイトとわかって警戒を解いてくれたのだと解釈して、あれこれと話しかけた。

#　季節のこと、クラスのこと、来月以降の学校行事のこと。塩野はうんとかふーんとか、適当なを打っている。私はかまわず話しかけていたが、話が途切れたときに、彼女がじっと私を見ているのに気がついた。

#「何？」

#「よくしゃべるなと思って」

#「うるさかった？」

#「うるさくはない」

#　うるさくないならいい。

#　塩野は、「粉もん屋　さとだ」と看板のかかった店の前で足を止めた。

#「……ここに寄っていくから」

#　建前としては登下校中の買い食いは禁止だが、ほぼ誰も守っていない校則だ。いちいちめ立てする気はない。

#　私も、注文する彼女の横に並んだ。

#　私が一緒に店の前まで来たことに、塩野は驚いているようだったが、慣れた様子でたこ焼きを注文し、から財布を出して代金を払う。

#　店先に硬そうな丸椅子とベンチが並んでいて、そこで座って食べることもできるようだ。

#　はいたこ焼き一丁ね、と渡された容器を、塩野は、「ども」と小さく言って受け取った。

#　そのまま歩き出そうとするので、「ここで食べないの？」と尋ねたら、あっちに公園があるから、と言われる。

#「店の前に座ってたら、人が見るから」

#「人通りのあるところのほうが安心でしょう。今日は私がいるからいいけど、一人のときは、人気のない公園でたこ焼き食べたりしちゃだめ。女の子なんだから」

#　口うるさいなと思われたかもしれないが、言わないわけにはいかない。

#　制服を着た女子高生というだけで、いつおかしな人間に目をつけられるかわからない世の中だ。警戒しすぎるということはない。

#　塩野は、思ってもみなかったことを言われた、という顔をしていたが、されたように頷いた。

#　それから、横道に入り、住宅街の中にある公園に私を案内する。

#　遊具は滑り台しかない、小さな公園だ。私たちは、滑り台の前にあるベンチに並んで座った。

#「お昼が少ないんじゃない？　だから足りなくなるのよ」

#「ごはんとは別もの。食べたくなるんだよ、単純に」

#　店員に渡された容器には、湯気の立つ焼きたてのたこ焼きが並んでいる……はずだが、そのたこ焼きが見えなくなるくらいたっぷりと、ソースとマヨネーズがかかっている。かつおぶしと青のりも、びっくりするような量だ。

#　塩野はで、ソースとその他もろもろまみれのたこ焼きを一つ口に運んだ。

#　かつおぶしと青のりはともかく、ソースとマヨネーズの量は明らかに多すぎる。塩分とカロリーがとんでもないことになっていそうだ。それ以前に、こんなにいろいろかかっていて、もとの味などわかるのだろうか。

#　塩野が、もぐもぐと口を動かしながらこちらを見た。

#「もしかして、食べたことない？」

#「……おでいただくきなら、一度」

#　食べる、と言って、塩野が容器を差し出してくる。抑揚があまりない話し方で一瞬わからなかったが、私は、それが「食べる？」という質問であることに気がついた。

#　見ると、たこ焼きに、爪楊枝は二本刺してある。

#「食べ方わかる？」

#「食べ方？」

#「……冗談だよ」

#　私はハンカチを取り出して膝の上に広げた。

#「いただきます」

#　なるべくソースのかかっていないところを探したが、どこも同じだった。端っこの一つに爪楊枝を刺して、口に運ぶ。

#　こぼさずに食べるには、一口で食べるしかない。

#　ソースのかかった表面は大丈夫だったのに、中が熱くて驚いたが、膝の上からハンカチをとって口元を隠し、なんとかごまかした。

#　熱いけれど、おいしい。

#　ソースとマヨネーズって、合う。外はかりっとしているのに中はふわふわと柔らかくて、卵の味もしっかりしていて、その中で紅しょうがの存在感も効いている。

#「……おいしい」

#　正直な感想をく。

#　塩野は少し得意げな表情になった。

#　それから、二つ目を食べ始める。

#　口元に、かつおぶしのかけらがついている。

#　その横には、小さなほくろがある。

#

#

#　生まれて初めてたこ焼きを食べた翌日、私は二日連続で、先生から何の用事も仰せつかることなく下校時刻を迎えることができた。一緒に帰ろうと塩野に声をかけるつもりだったのに、クラスメイトに話しかけられて、週明けの小テストの範囲を教えてあげているうちに、気がついたら塩野は教室からいなくなっていた。いつものんびりしているくせに、帰るときだけは素早い。

#　仕方なく一人で学校を出て、いつもの帰り道を歩いていると、昨日たこ焼きを買った店よりも数メートル手前にあるクレープ屋に、目立つ後ろ姿を見つけた。

#　また買い食いをするつもりらしい。彼女が列に並んでいるうちに追いついたようだ。

#　まだ私に気づいた様子はないが、ちらちらと後ろを振り向いて、何かを気にしている様子だ。

#　何を見ているのかと思ったら、歩道で立ち止まって、スマートフォンを手にきょろきょろしている二人連れの女性がいる。漏れ聞こえてくる会話を聞く限り、東南アジアからの観光客らしかった。

#　スマートフォンを見ながら不安そうにしているので、

#「お困りですか？」

#　私は二人に近づいて、日本語で話しかけた。彼女たちは顔をあげたが、言葉がわからないようだったので、英語でもう一度同じことを言ってみる。今度は伝わったらしく、彼女たちの表情が明るくなった。しかし私の英語はあくまで高校生レベルなので、ここから先会話を続けるには不安があった。

#　彼女たちは、英語で私に何か説明し始める。どこかへ行きたい、と言っていることくらいはわかった。見せてくれたスマートフォンの画面には、見覚えのある鳥居の写真が表示されている。

#「ああ、この神社。もう一本向こうの道です。ええと……塩野さん、英語できる？　説明してあげて。この信号を渡って、ラーメン屋さんがある角を右に曲がって坂をのぼったところにありますって」

#　塩野は、クレープ屋の列から抜けてこちらへ来て、彼女たちのスマートフォンを確認すると、私の説明した方向を指さしながら英語で道を説明し始めた。

#　大きな声ではないが、な英語だった。むしろ、普段日本語で話しているときよりも、はっきり話している気さえする。

#　観光客たちは、「ありがと」と日本語で言って、笑顔で歩いていった。塩野の説明はちゃんと伝わったらしく、正しく神社へ続く道を進んでいる。

#　安心して見送り、私は塩野に向きなおる。

#「ありがとう。並んでいたのにごめんなさい」

#「別に、いいよ。まだ注文してなかったし。ていうか、委員長にお礼言われることじゃないし」

#　塩野はこめかみあたりをきながら言った。

#「私も、気になってたんだ。さっきの人たち……迷ってんのかなって思ったけど、話しかけていいのかわかんなくて」

#　よかった、と小さく言って、クレープ屋の列に戻る。

#　私はそのまま、塩野の横に並んだ。

#　塩野はちらっと私を見たが、別に邪魔そうにはしなかった。

#「私も食べることにした」

#　念のために宣言する。塩野は、そうだろうな、というような表情で頷いた。

#「クレープも初めて？」

#「下校途中に食べるのはね」

#　短い列の先頭に並んだ若い女性が、の誘惑チョコクレームブリュレスペシャル、と注文するのが聞こえた。どういうものか想像できない。私はレジの横に貼られたメニュー表を確認した。中には、わかりやすい名前のメニューもある。

#　宇治抹茶ババロア白玉添えにしよう。

#「委員長、困ってる人がいたら放っておけないタイプだね」

#「そうかも、割とね。放っておけないというか、おかないというか」

#　それこそ委員長気質なのかも、長女だし、とつけ足して、通学鞄から財布を出した。

#　塩野はメニュー表を見ている。

#「話しかけてくんのって、それ？」

#「塩野さんは……」

#「塩野でいい」

#「塩野は困っていたの？」

#　私がき返すと、塩野は黙った。

#「困っていたとは知らなかった。委員長としてできることがあったら言って」

#「いや、別に困ってはいない」

#「そう」

#　よかった、と言ったら、変な顔をされた。

#「私が塩野に話しかけたのは、困っていると思ったからじゃなくて、そうしたかったから。背が高くてかっこいいし髪がきれいな色だし、目立つなあと思って見ていたから。友達になりたいと思っただけよ」

#　塩野はますます変な顔になったが、やがて、「わかった」と言った。

#　前に並んでいた客が何を注文するか迷っている間、私たちは少し話をした。

#　私が友達になりたいと言ったから気を遣ってくれたのか、塩野は自分のことを話してくれた。イギリスからの帰国子女だということ、髪の色は、もともと茶色だが、それをさらに一段階明るく染めていること。もともと茶色で天然パーマだから、子どものころの写真を提出して、学校側のＯＫをもらったこと。この情報開示は、なかなかに友達っぽい。

#「似合ってる」

#「校則違反だとか言わないんだ」

#「塩野の髪が茶色でも、誰にも迷惑はかからないよ」

#　彼女ほど明るい色は珍しいが、教師に目をつけられない程度に髪色を染めている生徒は何人もいる。

#　それに、今ここでこうしていることだって、厳密には校則違反だ。

#「それに私、この髪、好きだし。日に透けると金色に見えて、ライオンみたい」

#　お待たせしました、ご注文をどうぞ、と店員が言う。

#　塩野はぱっと目を逸らして、どれにする、と訊いた。

#

#

#　私は勉強も運動も、たいていのことは人並み以上にできる。その中でも、料理は得意だ。

#　母親が小料理屋をやっているから、その影響で、小学生のころから料理はしていた。出汁巻卵には、特に自信がある。

#　学校へ持っていくお弁当も、いつも自分で用意している。ほとんどの場合、夕食の残りに簡単な一品二品を足して詰めるだけだったが、今日は気合を入れた。

#　二人分作って、それは丁寧に弁当箱に詰める。普段の自分用よりもおかずの数を増やして、ごはんも、桜えびの混ぜごはんにした。

#　いつものように、昼休みを知らせるチャイムが鳴ると同時に教室を出ようとした塩野をつかまえ、校舎の北側出口へと連行する。昼食時は人が少ないエリアなうえ、出口の両サイドにある花壇の縁が、ちょうど座りやすい高さなのだ。

#「この間、たこ焼きをごちそうになったお礼」

#　そう言って弁当箱を渡すと、塩野は驚いた様子で受け取り、ふたを開けてさらに驚いた顔になった。

#「え、エビで……」

#　帰国子女の割に日常生活で慣用句を使いこなしている。

#　彼女の反応に、私は気をよくした。

#「料理は得意なの。おいしいから食べてみて」

#　れんが造りの花壇のふちに、並んで座って食べ始める。

#　塩野はまず卵焼きを食べて、目を丸くした。

#「……すごい。おいしい」

#「でしょう。今回はシンプルな出汁巻きにしたけど、お弁当ならや大葉を巻いて焼いたり、たらこをほぐして混ぜたのもおすすめ。今度また作ってくるから、食べ比べてみて」

#　魔法瓶にほうじ茶を作ってきている。ふたに注いで塩野に渡した。

#　塩野はピーマンのじゃこめを食べたところだった。熱いほうじ茶を飲んで、ほう、と息を吐く。

#「おいしい……すごい」

#　塩野はさっきから同じことしか言っていない。しいのでもっと言ってほしい。

#　これまで口うるさい委員長としか思われていなかった感があるが、これで私を見直したはずだ。やはり胃袋をつかむのは有効だ。

#　私が満足して自分の分のじゃこ炒めを口に運んだとき、

#「あれ、椿が外にいる。珍しい」

#　すっと影がさしたと思ったら、が立っていた。高校になってからクラスが同じになったことはないが、小・中学校と一緒だった幼なじみだ。

#　部室棟に用があるらしく、左手に提げたビニール袋に、部誌と菓子パンとパック入りの牛乳が透けていた。

#　急に現れた康太を、塩野はぽかんとした表情で見上げている。

#「あ、卵焼きほしい。もらっていい？」

#「いいわけないでしょ」

#「頼む！　今日パンなんだよ。部活あるし、たんぱく質足りなくて倒れるかも」

#　仕方ないので、箸を渡してやった。康太はとして私の弁当箱から卵焼きをとって、口に放り込む。私の卵焼きは母のレシピ通りで、康太は小さいころから、母の作るそれが好物だった。

#「あーやっぱうまい。薄味なんだけど、味のバランスが絶妙なんだよなあ」

#「これは佐野康太。家が近所で、ご両親が共働きだから昔はうちで一緒にごはん食べたりしてたの」

#　あっけにとられている塩野に説明した。

#　康太はそのとき初めて塩野に気づいたようで、彼女の膝の上の弁当箱に目をとめ、「あれ」という顔になる。

#「おそろいの弁当食べてんの？　すげー仲良し」

#　からかう口調ではなく、単純な感想を述べる口調だった。康太はそういう男だ。思ったことをすぐ口に出す。

#「椿が誰か一人とそんな仲良くなんの、珍しいな」

#　よかったな、と続けそうな調子だったので、私はいをして、さりげなく遮った。

#「彼女は、同じクラスの……」

#「知ってるよ、塩野さん。一年のとき同じクラスだったし」

#　ね、と康太は塩野に笑顔を向ける。

#　塩野は顔を赤くして頷いた。

#　まったく私の好みではないが、康太は人懐っこいし、背が高くて顔も派手だから女子には人気がある。

#「部室棟に行くんでしょ。さっさと行って。昼休み終わるよ」

#　邪魔しないで、と口に出さなかったが、康太はハイハイと素直に言って歩き出した。

#「おばさんに、また卵焼き喰わせてって言っといて」

#　ビニール袋からパンを取り出して、歩きながら食べ始めている。食い意地が張っているのは、小学生のころから変わらない。

#　中学生のときから、百回くらい「佐野くんとつきあってるの？」と訊かれていた。主にクラスの、あるいは康太のクラスの女子から。そのたびつきあっていないしその予定もないと答えてきたのだが、訊かれてもいないうちから「つきあってないから」などと弁解するのは自意識過剰だろうか。

#　誤解されるのも嫌だったが、塩野にその質問をされるのも、なんだかちょっと嫌だった。

#　塩野はけたように康太の後ろ姿を見ていたが、今は、下を向いてえを食べている。

#

#　私が塩野の分もお弁当を作って持っていくようになると、塩野はお昼代として持ってきていた五百円を私にくれた。

#　一人分作るのも二人分作るのも労力はさして変わらない。いらないと言ったのだが、材料費もかかるし、と言われて三百円だけもらうことにした。材料費は三百円もかからないが、もらったお金は一緒に下校途中におやつを買って食べる費用に充てることにした。

#　塩野は、私のお弁当を食べるようになってから、買い食いの回数が減ったという。

#　たこ焼きやクレープの店に寄るかわりに、今日はドラッグストアのコスメ売り場に二人で来た。私が使っているリップクリームが残り少なくなってきたので、買うのにつきあってもらった形だ。

#　塩野はカラフルなパッケージの商品が並んだ棚の前にいる。私は、コンビニでもよく見かける有名なメーカーの薬用リップを手に取った。

#「委員長が普段使ってるリップどれ？　同じの買う？」

#「今は、以前京都に旅行に行ったときに買ったのを使ってる。ひのきの香り」

#「渋い……」

#　塩野は私の顔に鼻を近づけて、香りはわかんないな、と言った。近い。

#「塩野が使ってるのは、ここにある？」

#「これだけど、委員長には、オレンジより別の色がいいかも」

#　塩野が指したのは、薄いオレンジ色がつくタイプのものだ。何種類も色があって、テスターが並んでいる。

#「これとか？　チェリー」

#　塩野がテスターをとって渡してくれた。

#　私はティッシュでテスターを拭いて、勧められたリップを塗ってみる。これまで使っていたものよりも、するっとした感触だった。

#「……やっぱこっちのほうがいいかも」

#　塩野はしげしげ私を見た後で言った。今度は、淡いピンク色のものを渡される。ほとんど色はつかないが、ほんのりピンクになってが出るタイプだと書いてある。

#「メイクしてないのに、リップだけ濃いと浮いちゃうから。制服だと余計」

#　それもそうだ。つけ心地は同じだろうから、試さずにピンクのほうを買うことにする。

#　ついでに、ネイルのコーナーやヘアケアコーナーを冷やかした。シャンプーはいつも家族で同じものを使っているので、これまであまり気にしたことがなかったが、随分たくさん種類がある。並んでいる中で私が知っている商品は、椿油のシャンプーくらいのものだった。

#「委員長の髪はさらさらだな」

#　塩野が、初めて気づいたかのように言った。

#「ありがとう。よく言われる」

#「……そうだろうな」

#「前にも言ったけど、私は塩野の髪が好きだよ」

#　私が言うと、塩野は恥ずかしかったのか、目を逸らしたが、

#「そのうち、赤くしたいんだ。こういう赤。さすがに高校じゃ無理だけど」

#　そう言って、陳列されたヘアトリートメントのラベルを指さす。さっき私が試したリップクリームのような、鮮やかなチェリーレッドだ。

#「似合いそう」

#　思ったとおりを口に出した。

#　塩野は、嬉しそうに笑う。照れたように、歯を見せて。

#　そのとき唐突に、仲良くなれたかも、と思った。

#　休みの日に二人で出かけたことはない。私服も見たことがない。でも、私たちは、友達と言えるかも。

#　嬉しい。

#　今度休みの日、どこかへ遊びに行かない？　それとも、私の家に遊びに来ない？　そう提案するつもりで口を開きかけて、私はふいに、塩野の横顔にれた。

#　顎から頰のラインがすっとしていて、鼻が高くて、塩野は横顔が特にきれいだ。

#　薄い唇と、その横にあるを見つめて、こんな感じだっただろうか、と思う。

#　以前は、触ってはいけないきれいな獣のようだと思っていたけれど、今は、もっと近くにいる気がする。

#「委員長、今度さ」

#　オレンジ色がのった唇が動いた。

#「卵焼きの作り方、教えて」

#　――塩野はもともときれいだし、かっこよかった。私は最初からそう思っていた。

#　でも、少し変わった。背すじが伸びた。前より笑うようになったし、目が合うようになった。

#　自分でおいしいお弁当を作れるようになったら、私のお弁当はいらなくなるだろうか。それならそれでいい。それぞれ自分で作ったお弁当を、また一緒に食べればいい。

#　前より話しやすくなったと、クラスの皆も思っているはずだ。いいことだ。友達が多くて悪いことなんてない。皆が塩野のよさに気づいて、彼女の学校生活がより充実するなら、友達として、喜ぶべきことだ。

#　前よりもっときれいになった塩野に、誰かが、たとえば、康太が気づいたら。

#　それは……それだって、少しも悪いことじゃない。

#　私はとっくに気づいていたのに、皆気づくのが遅いよ、と、少しの優越感を持って、私はそれを眺めるだけだ。むしろ、誇らしく思うだろう。

#「いいよ、もちろん。いつでも」

#　笑顔で言った。

#　塩野が、卵焼きを誰のために作りたいと思ったのかは、考えないと決めた。

#　それなのに。

#

#　康太に、彼女ができた。

#　私がそれを知ったのは、そのたった数日後のことだった。

#　髪の長い一年生で、部活の新しいマネージャーだという。

#　もちろん、康太は、ただの幼なじみの私に、わざわざ報告なんてしてこない。たまたま、隣のクラスの女子が話しているのを聞いたのだ。

#「えー、ショック。後輩にとられるとか」

#「ていうか、二組の人とつきあってるんじゃなかったんだ」

#　彼女たちは廊下の窓際に陣取って、すぐ後ろに私がいることにも気づかず話していた。

#　二組の人というのはたぶん私だ。

#　通り過ぎるとき、ちらっと窓の下に目をやると、部室棟へ向かう途中らしい康太が髪の長い女子と親しげにしているのが見えた。あれが彼女だろう。顔はよく見えないが、小柄でな女の子だった。

#　教室に入ると、塩野が窓際の席で帰り支度をしている。最近は、クラス委員の用事があって私がすぐに帰れないときでも、一人でさっさと帰らずに待っていてくれるようになった。

#　教室を出るのはもう少し後にしよう。康太たちは正門とは反対側にある部室棟へ向かっているようだったから、今外に出ても鉢合わせになることはないだろうが、念のためだ。

#　私が声をかける前に、塩野のほうがこちらに気づいて顔をあげた。

#「委員長？」

#　私が黙って立っていたから、不審に思ったのだろう。心配そうに声をかけてくれたので、何でもないとごまかした。

#　私はまだ、塩野に卵焼きの作り方を教えていない。

#　隠し続けることなんてできるわけもないとわかっていたが、もう少し、と思っていた。

#「あ、佐野くんだ。彼女できたって本当だったんだ」

#　教室の窓から外を見たクラスの女子が、声をあげた。彼女と仲のいいもう一人が、え、どこどこ？　と窓際に駆け寄る。

#　塩野の表情が変わった。私しかそれに気づいていない。

#　塩野は窓のほうを振り向いて、彼女たちの視線の先を見た。

#「あれが彼女？　結構普通の子っぽいけど……え、うちの学年じゃないよね。秋山さん、知ってる？」

#「さあ、私は知らないけど」

#　冷たく聞こえないように、でも、興味がないということが伝わるように応える。

#　ちょうど、康太たちが校舎を突っ切って、部室棟のある反対側へ抜けたタイミングだったのだろう。私は教室の窓には近づかなかったが、塩野の位置からは、彼らの姿が見えたはずだ。

#　胸の中心がぎゅっと引っ張られるような感覚をやりすごし、唇を引き結ぶ。

#　私が塩野の気持ちに気づいていることを、彼女は知らない。気づかれてはいけない。

#　何でもない風を装って話しかけようとして、せっかく落ち着かせたはずの心臓が跳ねた。

#　としたように窓の外を見る、塩野の目が涙をたたえている。

#　情けないことに、私は激しく動揺した。

#　泣くんだ、と思った。

#　塩野って、泣くんだ。

#　いつもの私なら、さりげなく人目につかないように塩野を隠して、その場から離れられるように誘導しただろう。もしくは、目を逸らして気づかないふりをして、本人が取り繕うのを待ったかもしれない。

#　それなのにそのどちらもできず、私は棒立ちになって塩野を見ているしかなかった。

#　窓から外を見下ろしている女子たちは、気づいた様子はない。

#　塩野はもともと注目されるタイプではなく、教室に人も少なかったので、誰も気づいていないようだった。せめてもの救いだ。

#　きをした拍子に、つうっと涙が頰をすべり落ちる。

#　に涙の粒がついてれている。

#　それを、私だけが見ていた。

#

#

#　月曜日の朝、教室に入ると、いつもの窓際の席に座った塩野の髪が、短くなっていた。

#　私は手に持った鞄を落とすところだった。

#　色はそのまま、首の半ばあたりまでの長さになっている。

#　髪が短くなったぶん顔がよく見えて、きれいな輪郭が強調されていたが、光の縁取りのようだった長い髪がなくなった横顔は、なんだか寒々しく見えた。

#　細くて長い首が、まっすぐ伸びた背中につながっている。

#　大人っぽくて、よく似合うけれど――泣きたくなった。

#「おはよう」

#　塩野に先に声をかけられて、はっとする。

#　私は平静を装って「おはよう」と応えた。

#「髪、切ったんだ」

#　触れないのも不自然なので、ただ事実を指摘する口調で言う。

#　うん、と短く答えて、塩野は少し居心地が悪そうにした。

#　似合うと言ってあげるべきなのに、私は何も言えずに席につく。

#　今日のお弁当に卵焼きは入れていない。入れても入れなくても意識してしまうと思って迷ったが、かわりに半分に切った煮卵を入れることにした。

#　昼休み、外には行かず、「たまには」と言って、音楽室でお弁当を食べた。

#　塩野は何故とも訊かずについてきて、煮卵の入ったお弁当をおいしいと言って食べた。

#　少し元気がないだけで、塩野はいつもの塩野だったけれど、私のほうがなかなか、髪の短い塩野に慣れない。

#　むきだしになったうなじを見ると、それだけで泣きそうになる。

#　そんなに好きだったの、と訊いてしまいそうで、そのたびに言葉を飲み込むせいで、口数が少なくなった。

#　どうして自分がこんな気持ちになっているのかわからないし、こんな気持ちが何なのかも、わからない。

#　自分で作ったお弁当がおいしくなかった。塩野と食べているのに。

#　きっと、時間が必要なのだ。

#　数日もすれば、私は塩野の新しい髪型に慣れる。塩野も少しは元気になるだろう。校内で康太と彼女を見かけても平気なくらいに、いつかは回復する。

#　こんな風にぎこちないのは、今だけだ。

#　いつも通りにしていよう、そのうちに本当に、いつも通りになるから。授業中ずっと考えて、そう結論を出して、授業が終わると同時に、いつものように窓際の席まで塩野を迎えに行った。

#　何か食べて帰ろうと提案すると、塩野は、なんだかほっとした様子で頷く。

#　よかった。自然に振舞えていたようだ。

#「塩野は何がいい？」

#「コロッケとか」

#「おやつにコロッケ？　おかずじゃない？」

#　話しながら教室を出て、廊下を歩いていたら、

#「あ、いた、椿！」

#　突然名前を呼ばれた。

#　前方から、康太が歩いてくるのが見える。

#　その後ろには、二年生の教室の前で居心地悪そうにしている、髪の長い一年生の姿もあった。

#「これ、母さんが、おばさんに渡してってさ。あと、何かの会の集まり用にお弁当注文したいから電話しますって言ってた」

#　今は彼女と一緒だから今度にしようとか、まず彼女を紹介しようとか、そんなことは思いつきもしない様子で、康太は私に近づいてきて、文庫本サイズの包みを渡す。母親同士の物の貸し借りだろう。よくあることだが、一年生だったら、私と康太が幼なじみだと知らないかもしれない。目の前でほかの女を名前で呼んで、彼女の気を悪くさせていなければいいが。康太は、そういうところの配慮はまったくできない男だ。

#　私の横にいる女の子が、自分を好きかもしれないなんてことにも、気づくはずのない男だ。

#「……わかった」

#　私は包みを受け取って鞄におさめた。

#　すぐ横にいる塩野の顔を見られない。早く行って、と康太とその彼女に念じる。なのに、

#「あれ、塩野さんだ。髪短い」

#　私の願いもむなしく、康太は塩野に目をとめる。

#　そして、まったく何の含みもなく、ただ思ったとおりを口に出す。

#「似合うじゃん。イメチェン？」

#「……康太」

#　語尾にかぶせるように名前を呼んだ。

#「彼女を待たせてるんでしょ。私たち、用があるから」

#　強めの口調だったかもしれないが、康太なら、「たまたま機嫌が悪かったのかな」「急いでるのかな」と思うだろう。

#　廊下の先、進行方向には、あの女の子がいる。

#　私は塩野の手をつかんで、反対方向へ歩き出した。きょとんとしている康太とその彼女に背を向け、振り返らないでずんずん進む。

#　塩野は引っ張られるまま、ついてきた。

#　出口と反対方向に用なんてない。意味もなく来た方へ引き返して、さっき出てきたばかりの教室に入った。

#　入れ違いに、最後に残っていた生徒が出ていったので、教室には私と塩野だけになった。

#「どうしたの」

#　私に手首をつかまれたまま、塩野は優しい声で言った。

#　手をつかんだまま振り返ると、彼女は、心配そうに私を見ている。

#　失恋した友達を慰めるのは私の役目なのに、私のほうが心配されてどうするのか。

#　情けなく思いながら、こんなはずじゃないのにとちながら、でも、塩野に優しくされて嬉しい。失恋したばかりなのに、私を気遣ってくれるのが嬉しい。

#　その一方で、理不尽だとわかっていても、胸に渦巻く思いがあった。

#　たぶん、塩野が珍しく優しい顔をしていたから、甘えたくなったのだ。

#「……髪」

#「髪？」

#「なんで切っちゃうの」

#　ああ、言ってしまう。

#「好きだったのに」

#　好きだって言ったのに。

#　恨みがましい言葉に、塩野は目をかせている。

#　私がつかんだままの塩野の手はだらんと力が抜けて、でも、私の手をふりほどこうとはしない。

#　塩野の髪が好きだった。本人の普段の振舞いとは不釣り合いに派手な色のそれを見せつけるでもなく、ただ、その髪が自分にとっては自然なのだというように、気負わずにそこにいるのがかっこよかった。人にどう思われたいと思って、そのために染めたわけではないのだろう。

#　似合っていた。彼女らしいと思った。彼女の世界が、彼女だけで完結していることの象徴のようだと感じていた。

#　それなのに、切ってしまった。

#　失恋したからなんて、そんな、どこにでもいる普通の女の子みたいな理由で。

#　塩野の髪だから、切るのも自由だけれど。髪を切れば吹っ切れるなら、好きなだけ切ればいいけれど。塩野だってあの髪が気に入っていて、誰に何と言われようと、自分が好きで、自分のためにあの髪でいたはずで……誰かのために切ることなんか、考えもしなかったはずなのに。

#　あの髪は塩野の一部だったのに。

#　自分の一部を切ってしまうほど、切って一緒に捨てなければいけないほど、塩野が誰かを好きになるなんて、想像していなかった。

#　たぶんそれが一番ショックだったのだ。

#　友達が失恋して傷ついていることよりも、私にとっては、そちらのほうが重要だった。

#　やめてよ。恋なんかしないでよ。塩野の気持ちに気づいたときから、私はずっとそう思っていた。言えるわけがないけれど。

#　誰かのために卵焼きを作りたいなんて、そんなこと考えないでほしい。

#　料理なんてできなくたっていい。私がなんでも作ってあげるから。

#　誰かのために可愛くなんて、ならなくていい。塩野はそのままでいい。デートだって私とすればいい。どこにでも行くのに。

#　置いて行かないで。

#　あなたと、明日も、一緒に帰りたい。

#　それだけなのに。

#　じわっと目の奥が熱くなった。まずい、泣く。みっともない。

#　慌ててうつむいたとき、

#「委員長」

#　塩野が、私を呼んだ。

#「私が髪を切ったから泣いてる……わけじゃないよね」

#　遠慮がちに言う。私がこんな醜態をさらすのは初めてだから、困惑するのは当然だ。せめて幻滅されていないといいけれど。そのうえ、髪を切ったことを責められて、塩野にしてみればわけがわからないだろうに、彼女は変なところでだった。

#「私に言いたいことがあるんだったら、言ってほしい。……わかってないかもしれないから」

#　他人の言うことにはしない、他人のことにも頓着しない塩野が、私のことを理解しようとしてくれている。

#　嬉しいことのはずなのに、それを喜ぶ余裕はなかった。

#　できれば塩野にはいいところだけ見せたかったのに、こんなみっともない姿をさらして、今さら何を伝えたらいいのか。

#　態勢を立て直すために、空いているほうの手で目元をぬぐう。

#　息を吸って、考える。

#　塩野に言いたいこと。あるはずだ。きっとたくさんある。康太なんて塩野には似合わないよとか、あいつデリカシーないからやめたほうがいいよとか、私といるほうが絶対楽しいよとか、だから当分、次の恋も探さないでいいよとか。

#　結局私が塩野に求めていることは、れるほど勝手なわがままばかりで、それに気づいて、情けなさにまた涙が出た。

#　私とだけ仲良くして。私以外に特別を作らないで。

#　そんなこと、言えるわけもなかった。

#　ったそばから、ぼとぼと涙が落ちた。

#　何を言っても情けない涙声になりそうで、なかなか口を開けなくて、しゃくりあげながらようやく言った。

#「明日も一緒に帰りたい……」

#　結局のところ、今口に出せる私の願いはそれだけだった。

#　たったそれだけを言うために号泣している私に、塩野は神妙な声で、わかった、と言った。

#「一緒に帰るよ。明日も……今日も」

#　それでも私が泣きまないので、塩野は困った顔をしている。

#　私は右手で塩野の手首を握ったまま、左手で不自由しながら涙を拭く。

#　しばらく涙は止まりそうにないけれど、意地でも右手は放さない。

#

#＊＊＊

#

#　人の顔と名前をえるのは得意じゃない。

#　しかし、秋山椿のことは、かなり早い段階で認識した。

#　彼女はクラス委員だったので、名前を聞く機会も多かったし、教室の最前列、ど真ん中に座っていて、私の席からもよく見えたのだ。斜め後ろからの横顔だけだが。

#　目鼻立ちがはっきりしていて、肌が白く、背中まである真っ黒な髪はサラサラだ。姿勢がよくてとしている。そこにいるだけで人目を引くタイプだった。

#　間違いなく美人なのだが、ぴしっとしていて隙がないし、切れ長の目が、少女漫画のライバル役みたいだなというのが第一印象だった。きれいだけど、ちょっと意地悪そう。性格、きつそう。

#　失礼な感想だが、思うだけなら許されるだろう。

#　とにかく、自分とは全然タイプが違うし、合わないだろうから、積極的にはかかわらないようにしようと――そもそも、自分から誰かに積極的にかかわることなんてないが――思った。

#　この学校は、校則も比較的ゆるく、のんびりした校風だ。小・中学生時代を海外で過ごした私は、日本の高校では浮いてしまって苦労するのではと両親に心配されていたのだが、「人は人」という考えのクラスメイトが多かったのか、一年生のときは平和に過ごすことができた。特別仲のいい友達はいないが、いじめ等のトラブルもなく、今のところ学校生活に不満はない。

#　とはいえ、校内にジュースやお菓子の自販機がないとか、服装や髪型に決まりがあるとか、海外の学校と比べれば不自由は多いし、最初は戸惑った。登下校中にヘッドフォンで音楽を聴くのもダメらしい。海外にいたときは、スクールバスで送迎があったから、音楽を聴きながら登下校ができたのに。

#　わざわざ反抗しようとは思わなかったが、全部言うとおりにして、ルールに合わせてそれまでの自分を変えてしまうのも嫌だったから、茶色い髪は地毛で、パーマも天然ですということで通している。それで特に何も言われないので、この学校とこの国でもなんとかやっていけそうだと安心した。

#　この学校も、もう二年目だ。一年目は悪くなかった。多くは求めないから、また一年平和に過ごせるといい。変に干渉されることさえなければ、私は一人で楽しく生きていられる。

#　終業のチャイムが鳴ると同時に荷物をまとめ、席を立った。

#　部活も習い事もしていないので、急いで教室を出る必要はないのだが、おやつの時間が遅くなると、夕食に差し障る。

#　帰り道での買い食いは、毎日の楽しみだった。

#　日本は食べ物がおいしいのがいい。安くてすぐ食べられるものがおいしいというのは特にポイントが高い。日本食を食べて幸せを感じているとき、やっぱり自分は日本人なんだなと実感した。

#　たとえば、ソースとマヨネーズの組み合わせは、日本にしかないものだ。まず、あの濃厚などろっとしたソース自体が日本独特だ。そこにかつおぶしと青のり。生地の中に練り込まれた紅ショウガのアクセント。

#　今日のおやつは絶対にたこ焼きだ、と決意して校門を出て、自宅までの道を歩いていると、

#「塩野さん。帰り道、こっちなの？」

#　後ろから声をかけられた。

#　振り向いて、ぎょっとする。

#　秋山椿だ。

#　何故ここに、と思ったら、彼女の家も同じ方向らしい。これまでは、クラス委員の用事等で下校時刻が遅くなることが多かったせいで、一緒にならなかったようだ。クラス委員も大変だ。

#　椿は気さくに話しかけてきた。しかも、何故か私の横に並び、一緒に歩き始める。あれ、何だこれ、一緒に帰る流れ？

#　私が戸惑っていると、椿はそれをどうとったのか、

#「同じクラスの、秋山椿だけど」

#　に名乗った。

#　いや、知ってるよ。さすがに。

#　私を何だと思っているのだ。

#　知らない人だと思って戸惑っていたわけではない。

#　脱力してしまい、「知ってる」と返すにとどめた。

#　椿は頷いて、またどうでもいい話を始める。

#　なんだかうるさそうなのにつかまった、と思ったが、こんなことで、おやつの予定を変更するつもりはない。

#　私がたこ焼き屋に寄っていくと言うと、意外なことに椿もついてきた。

#　買い食いは校則違反だと言われるかと思っていたが、それについては何も言わない。そのかわり、公園で食べようとしたら、一人のときに制服のまま、人気のない場所には行かないほうがいいと注意された。

#　日本は犯罪が少なくて、小学生だって一人で出歩けるくらい安全な国なのに。

#　女子高生とは言っても、わざわざ私を選んで襲うような物好きはいないだろうと思ったが、ここはおとなしく頷いておく。

#　二人で並んでベンチに座り、容器のふたを開ける。ソースとマヨネーズにかつおぶしが山盛りになったたこ焼きに、椿は若干んだようだった。こいつは夕食前にこんなものを食べるのか、と思われているのだろう。かまわず、刺してあった爪楊枝をつまんで一つを口に入れた。

#　やっぱりおいしい。間違いない味だ。味わっていると、

#「お昼が少ないんじゃない？　だから足りなくなるのよ」

#　椿が言った。

#　お母さんか。

#　椿はたこ焼きを食べたことがないようだ。帰国子女の私でも食べたことがあるのに。

#　分けてあげたら、「いただきます」と言って爪楊枝で上品に口に運んだが、熱かったようではふはふ言っていた。たぶん口が小さいせいだ。

#　ごく自然に口元を隠す仕草がきれいだった。食べ終わった後は、ハンカチで、ソースのしずくのついた指先を拭いている。品のいい振舞いが身についている感じだ。

#「おいしい」

#　そりゃよかった。

#　なんとなく愉快な気分になった。

#　私はたこ焼きを頰張りながら、秋山椿に対して抱いていた印象を改める。

#　思ったとおりの委員長気質ではあるが、思っていたほどとっつきにくくはない。

#　結構普通だな。

#

#　それ以来、椿は何かと話しかけてくるようになった。

#　たこ焼きが気に入ったのか、帰り道での買い食いにも毎回つきあう。生クリームをたっぷり絞ってチョコレートソースをかけたクレープを見て、ソースたっぷりたこ焼きを見たときと同じ表情をしていたが、結局おいしいと言って完食していた。

#　ここ数日でわかったことは、秋山椿が、思っていたより変なだということだ。

#　お高くとまっているわけではない、という意味で、意外と普通なんだな、とあのときは思ったが、それとはまったく別のベクトルで、椿の行動は予想外だった。

#　帰り道だけでなく、休み時間にも話しかけてくる。昼食を一緒に食べようと誘う。当然のように、教室を出るところから一緒に帰る。やたらと、私にかまう。

#　人の世話を焼くのが好きなのかもしれない。

#　そう思って見れば、椿は自分からクラスの面倒な雑事も引き受けるし、道に迷っている人がいれば声をかける。それをどれも、当然のようにやってのける。

#　長女？　と訊いたら、肯定された。下に弟がいるらしい。納得だ。誰かの世話を焼くのが習い性になっているのだろうか。

#　それにしても、何故私にばかりかまうのか。私が浮いているからか？　特に不便は感じていなかったのだが、孤立しているように見えたのだろうか。

#　一度一緒に帰ってから、なんとなく意識して目で追うようになったが、椿は、すべてにおいてお手本のような生徒だった。

#　しっかり者で成績優秀、教師の信頼も厚く、人に頼られるタイプ。体育の授業の様子を見る限り運動もできるようだ。いつもぴんと背すじが伸びていて、堂々としている。

#　体幹がしっかりしているのか、歩くときに体が揺れないのにも驚いた。立っていても座っていても、頭から足先まで一本筋が通っているかのようにぴしっとしている。

#　よく黒板に、あんなにまっすぐきれいな字が書けるものだと感心する。

#　椿を見て、自分が猫背になっていることに気づいて姿勢を正す、ということが何度もあった。

#　おすまししている様子をみれば、ちょっとむかつくくらいに非の打ちどころのない優等生だが、一緒に買い食いをしているときの椿は、完璧からは程遠い。はっきり言ってうるさい。子犬がころころまとわりついてくるような感じだ。私はそれが嫌じゃなかったが、本人はショックを受けそうだから言わないようにしている。

#　あと、意外とよく笑う。

#

#　一緒に帰るようになって数日経ったある日、椿は私に手作り弁当を持ってきた。

#　初めて買い食いした日にたこ焼きを分けてもらったお礼だと言っていたが、生真面目にもほどがある。

#　栄養バランスがどうのと言っていたから、私が昼食にコンビニで買ったパンやお弁当を食べているのを気にしていたのかもしれない。

#　海外では、お弁当といえばパンにチーズとハムか、ジャムを挟んだだけのサンドイッチが定番だ。あとは、りんご丸ごと一個とか、野菜スティックとか、せいぜい、ヨーグルトとか。

#　私はそれも嫌いではなかったが、日本におけるお弁当文化には憧れがあった。

#　特に、手作りのお弁当はそれだけでテンションがあがる。

#　校舎の外へ連れ出され、花壇の縁に座らされて渡された弁当箱を開けると、中には混ぜご飯とおかずがたっぷり詰まっていた。

#　プチトマトとかブロッコリーとか、テレビのＣＭでよく見かけるような彩りの野菜は一切入っていない。かろうじてピーマンが緑だが、他の野菜は煮つけてあるので、全体的に色合いは茶色い。

#　端的に言って、おばあちゃんぽい。これを椿が作ったのだと思うと、ちょっと愉快な気分になる。

#　いつも椿がそうするように、いただきます、と手を合わせてから箸をつけた。上品な味つけで、甘いもの、しょっぱいもののバランスもいい。特に卵焼きが絶品だった。出汁の味がする。

#　何でお弁当？　甲斐甲斐しすぎない？　いくらなんでも申し訳ないっていうか、私別に食べるのに困ってるわけじゃないんだけど……という戸惑いもなくはなかったが、何種類ものおかずとごはんがバランスよく詰められたお弁当の前には消し飛んだ。

#　おいしい。感動的においしい。

#　私の反応を見て安心した様子で、椿も、同じお弁当を食べ始めた。

#　しばらくの間、私はろくに感想も言わずに夢中で味わっていたが、

#「あれ、椿が外にいる。珍しい」

#　そんな声が降ってきて、顔をあげる。

#　背の高い男子が目の前に立っていた。

#　確か、佐野なんとか。

#　下の名前は忘れたが、一年生のとき同じクラスだった。

#　彼は女子に人気があって、いつも輪の中心にいたので、憶えている。

#　親しげに話しかけているところを見ると、椿とも知り合いらしい。というか……椿、と下の名前で呼んだ。

#　別のクラスに美人の彼女がいるらしいと聞いていたが、そうか、それが椿か。

#　一目見て納得する。美人とイケメン。絵に描いたようだ。お似合いだ。

#　佐野が椿の弁当箱から卵焼きを奪って去っていった後も、椿はなんとなく、ばつが悪そうにしている。さっきまで、佐野が来る前は、得意げにおかずの話をしていたのに。

#　気にしなくていいのに。

#　冷やかすつもりも、やっかむ気持ちもない。私は食事を再開した。

#　卵焼きはやっぱりおいしい。

#

#

#　椿と昼食をとるようになって、帰り道に買い食いする頻度は下がったが、下校は毎日一緒にした。食べ物を買うかわりに、書店や雑貨屋に寄り道をすることもあった。

#　今日は椿がリップクリームを買いたいと言うのでドラッグストアに寄る。

#　派手なポップや安売り商品の並ぶ店内で、椿はどうにも浮いていて、コラージュのようだった。

#　可愛いパッケージの商品がたくさん並ぶ中で、椿は、素っ気ないデザインの、薬用リップを手に取っている。

#　普段どういうものを使っているのかと訊いたら、旅行先で買ったヒノキの香りのリップクリームだと言われた。ヒノキ。さすがにドラッグストアのラインナップにはない。入浴剤ならあるかもしれないけど。

#　やっぱり、こういうところが、ちょっとおばあちゃんっぽいんだよな。ちょいちょいおばあちゃん。美少女なのに。しかも、おそらく椿自身も、自分が美人で人目を引くという自覚と自信があって、それを意識して行動しているところもあるのに、自分の行動がときどきおばあちゃんぽいことには気づいていないのだ。

#　やたらと私の世話を焼き、かまってくるのも、まさにおばあちゃんが孫にかまうみたいな感じだった。どうして私なのかはまだよくわからないが、髪の色が好きだと言われたから、私を物珍しく思っているのかもしれない。それこそ、文字通り、毛色の違う動物に興味を持つように。

#　私が使っているリップクリームを訊かれたので答えたが、薄いオレンジ色がつくタイプは、椿のイメージではない。

#　もっと淡い桜色とか、名前のとおり、椿色のイメージだ。同じシリーズで赤い色つきのものがあったので、テスターを手渡すと、椿はティッシュでそれを拭いてから、すっと唇の上に滑らせた。

#　口紅よりも薄づきのリップだが、ひとぬりで、唇が赤く色づく。

#　うわ、と思わず声が出そうだった。

#　赤いリップはだめだ。何かエロい。

#　リップをぬる仕草も込みで、いけないものを見たような気になる。

#「……やっぱこっちのほうがいいかも」

#　ほとんど色のつかない桜色のリップを渡す。

#　制服姿で濃い色のリップは浮いてしまうから、と説明すると、椿は納得したようだった。これにする、と言って早速レジに持っていく。

#　私も同じシリーズの色違いを使っているから、広い意味ではおそろいだ。

#　そう思った後、誰が見ているわけでもないのに、ちょっと恥ずかしくなる。

#　私は、おそろいのものがほしいのだろうか。そういう考えを持ったことはこれまでなかった。誰かに合わせるとか、誰かの真似をするとか、そんなこととは無縁だったのに。

#　その後も、買う予定のないコスメやヘアケア用品の棚を見て回った。誰かと一緒にこんなことをするのは初めてだ。

#　新しいヘアケア用品なんて必要なさそうなくらいまっすぐな椿の髪を見て、思わず「さらさらだな」と声が出た。そのままシャンプーのＣＭに出られそうだ。

#　椿らしい髪だ。そうなりたいと思うことはなくても、単純に、きれいだと思った。

#　椿は、平然と「ありがとう」と応える。

#　誉められ慣れている人間の反応だ。嫌味がなくて笑ってしまった。

#「私は塩野の髪が好きだよ」

#　椿は、こういうことを臆面もなく言う。

#　慣れないが、自分や、自分が好きなことを肯定されるのはやっぱり嬉しい。

#　子どものとき、テレビでたサバンナの動物の特集番組で、たてがみを風になびかせているライオンを見た。それがかっこよくて、のんびり歩いているだけでも存在感があって、日に当たる金色がきれいで、私もあの色にしたい、と言って母親を困らせたことがある。

#　今の髪の色はライオンのたてがみほど明るくはないが、初めて一緒に帰った日、椿にライオンみたいだと言われて、それを思い出した。

#　だから、いつかは赤く染めてみたいのだと、ずっと思っていたことを打ち明けた。椿は、大げさに騒がず、咎めもせず、「似合いそう」と言ってくれる。

#　いい奴だ。

#　何だか、「友達」って感じだ。

#　これまで、昼休みも帰り道も一人でも、全然淋しくはなかった。他人に気を遣うより一人のほうが楽だし、楽しいことは一人でしても楽しく、おいしいものは一人で食べてもおいしい。満足していた。

#　でも、椿と一緒に何かするのは、一人のときとはまた違う楽しさがある。

#　あのとき声をかけてもらったことを、今ではよかったと思っているが、椿が私の何を気に入ったのかは、今もわからない。二、三日で飽きるだろうと思っていたのに、意外と続いている。

#　椿の気まぐれで始まった関係だから、いつ終わるかもわからなかった。

#　お弁当だって、これからずっと作ってもらうわけにはいかない。高校を卒業したら会わなくなるかもしれないし、その前でも、椿に彼氏ができたら……いや、すでに佐野とつきあっているのだったか。だったら、そもそも、毎日私と帰っていていいのだろうか。

#　また前のように一人になるのは、そう先のことでもないかもしれない。

#　覚悟はしておこう、と思って、少し淋しくなった。

#　この毎日が今だけのことだとしても、高校二年生のとき、きれいでちょっと変わり者の友達がいたのだと、私はいつか思い出すだろう。

#「今度さ、卵焼きの作り方、教えて」

#　一緒に帰らなくなっても、別々に昼食を食べるようになっても、椿の卵焼きの味は覚えておきたい。そう思って言った。

#　椿は屈託なく、「いいよ」と応える。

#

#

#　椿が教室に入ってきたとき、何かあったと、すぐにわかった。普段から白い肌がさらに白く、表情が硬い。

#　どうしたのかと声をかけようとしたとき、

#「あ、佐野くんだ。彼女できたって本当だったんだ」

#「え、どこどこ？」

#　窓際にいたクラスの女子が声をあげ、それを聞いた椿の表情がまたった。

#　私が窓の外を見ると、部室棟のほうへと歩いていく佐野と、知らない女子生徒が見えた。

#　女子生徒は佐野の腕に寄り添って、見るからに親密そうだ。

#　すっと背すじが寒くなった。

#「うちの学年じゃないよね。秋山さん、知ってる？」

#　悪気のないクラスメイトが、よりにもよって椿に、そんなことを訊く。いつも通りの落ち着いた声で、知らないと答える椿の声が聞こえた。

#　平気じゃないだろう。だって、さっき、泣きそうな顔をしていた。

#　本当は泣きたいはずなのに、どうしてそんな平然とした声が出せるのか。

#　失恋したときくらい、完璧じゃなくたっていいのに。

#　気がついたら、私の頰を涙が流れていた。

#　私が泣いてどうする、と慌てて拭く。

#　椿はその日の帰り道、何度か泣きそうな顔をしたけれど、一度も泣かなかった。

#

#

#　髪を切った。

#　ちょうどリタッチのタイミングで、美容院に行く予定があったので、思い立って、「短くしてください」と言った。

#　私が失恋したわけじゃないのに、何故髪を切ろうなんて思ったのか、自分でもよくはわからない。でも、あんな表情をするくらいショックを受けているくせに、何も言わず泣きもしない椿は、きっと、髪を切って区切りをつけることもしないだろうと思った。だからかわりに私が、というのもおかしな話なのだが、そうしたいと思ったのだ。

#　かなりばっさり切ったので、頭が軽くなった。

#　制服を着て鏡の前に立つと、なんだかすっきりした顔をしていた。

#　椿はこれからも、私に、佐野の話をしないだろう。きっと何事もなかったかのように振舞うだろうから、私もそれに合わせて、何にも気づいていないふりをしなければならなかった。

#　月曜日の朝、髪を切った私を見て椿は驚いたようだったが、特に何も言わなかった。

#　昼休みは少しぎこちなかったが、下校時刻になると、いつものように席まで迎えに来てくれた。

#　椿も、いつも通りに振舞おうとしているのがわかって、ほっとする。

#　今日は帰りに何を食べよう、肉屋のコロッケはどうか、などと話しながら教室を出て歩いていたら、誰かが椿の名前を呼んだ。

#　正面から歩いてくるのは、佐野だ。髪の長い女子生徒と一緒だった。

#　椿を見つけて、嬉しそうに近づいてきて、話しかける。髪の長い彼女のほうは、所在なげに少し後ろで待っていた。

#　椿は一瞬顔をこわばらせたが、すぐに能面のような無表情になり、落ち着いた様子で相手をしている。

#　どうやら、椿と佐野は、最初から、つきあっていたわけではないらしい。そして佐野は、椿が自分を好きなことを知らないようだ。そうでなければ、無神経すぎる。

#　知らないからこそ、彼女と一緒にいるときに、無邪気に声をかけてくるのだ。

#「あれ、塩野さんだ。髪短い。似合うじゃん。イメチェン？」

#　私の髪なんかどうでもいいから、さっさとどこかへ行ってほしい。

#　佐野は何も悪くないが、椿は今、彼女と一緒にいる彼を見ていたくないはずだ。

#　私だって、彼らを前に無理をして平気なふりをしている椿を見ていたくなんてない。

#「康太」

#　いつもより少し低い声で、椿が言った。

#「彼女を待たせてるんでしょ。私たち、用があるから」

#　私の手をつかんで、廊下を引き返す。

#　階段へ向かう途中には、佐野の彼女がいたからだろう。

#　用もないのに教室へと戻る椿に、私はついていった。

#　誰もいなくなった教室に入って、椿はやっと足を止めたが、私の手をつかんだままだ。

#　大丈夫？　と訊こうとして迷って、「どうしたの」と声をかける。

#　さすがにこの後、何もなかったかのようには帰れない。

#　失恋の相談なんて柄ではないが、聞くだけならできる。できる限り優しくしようと心づもりをする。

#　椿は振り向いて、私と向き合った。

#　桜色のリップを塗った唇が、迷うように震える。

#「髪……」

#　髪？

#「なんで切っちゃうの……好きだったのに」

#　何を言われたのかわからなくて固まった。

#　うつむいた椿の顔が赤い。その目に、みるみるうちに涙がまった。

#　え？

#　佐野は？

#「……委員長」

#　もしかして、私は何か勘違いしていたのだろうか。

#　椿は、佐野のことで泣いているのではないのか。でも、今、佐野と会った後で泣き出した――そういえば佐野が、私の髪について何か言っていたような気はするが。

#「私が髪を切ったから泣いてる……わけじゃないよね」

#　おそるおそる訊いた。

#　まさかそんなわけがない。

#　でも、我慢していたのが決壊して、そのときにとっさに出ていた言葉ということは、私が髪を切ったことについて、何か思うところはあったのだろう。もしかして、私が勝手に、椿のかわりのつもりで髪を切ったことに気づいているのだろうか。それにしたって、泣くことはないと思うが。

#　やっぱり、椿はよくわからない。わからないけれど、

#「私に言いたいことがあるんだったら、言ってほしい。……わかってないかもしれないから」

#　わからないなりに向き合って、わかる努力はしたいと思った。

#　おそらく椿は、私のことで泣いている。そう思うと、悪い気はしなかった。少なくとも、失恋して泣いているよりは、それを何もできずに見ているよりは、ずっといい。

#　美人は何をしても美人だなと思っていたけれど、目と鼻を赤くしてぐしゅぐしゅ泣いている顔は子どもみたいだった。

#　でも、それが、なんだか可愛い。

#「一緒に帰るよ。明日も……今日も」

#　左手首はつかまれたままだ。ちょっと腕を動かして角度を変えて、きゅっと指先を握った。

#　椿は私と手をつないだまま、まだ泣いている。

#　可愛くて困る。

#

#

#　次の日、登校してきた椿は、髪を短くしていた。

#　私より短い、潔いショートカットだ。

#　真っ黒でつやつやな髪のショートは、それはそれで新鮮だった。昨日までよりも、少し幼く見える。

#　切ったんだ、と私が言うと、そうよと頷いた。顎を引いて、凜としたたたずまいで、もうすっかり、いつもの椿だ。

#　そういえば、私が髪を切ったときも、椿は同じことを言っていた。「切ったんだ」と。切ったことは見ればわかるのに、動揺して、それしか出てこないのだ。

#「きれいだったのに」

#　短くなった分、顔がよく見え、清廉な印象はさらに強くなった。とても似合っていたけれど、やっぱりちょっと残念で、恨みがましいような一言が漏れる。

#　椿は、それを聞いて、嬉しそうな表情になった。

#「仕返し」

#　なんだそれ。

#　してやったり、というような表情に、笑ってしまう。

#　椿は、私が笑うのを見て、

#「言い忘れてたけど……」

#　こほん、と咳払いをした。

#「短いのも可愛い。似合ってる」

#　今さらそんなことを言う。

#　顔は私のほうを向いているのに、目は逸らして、少しばつが悪そうにしているのは、昨日の自分の醜態――私は醜態だとは思っていないが――を思い出してのことだろう。

#　ショートだと顔がよく見えていいな。

#　そう思いながら私も口を開く。

#「委員長も、ショート、似合うよ」

#　そろそろ椿って呼んでよ、と不満げに眉根を寄せて言った。

#　じゃあ、私も悠で。

#

#